

# 論文

第3回

「よそ者」のパワー…アニメ聖地巡礼現象に見る  
新たな地域づくりの可能性

ファンと地域とのアツい関係…

新たなコミュニティの形



森 裕亮

（北九州市立大学  
法学部政策科学科 准教授）

## ■ファンⅡ「観光客」？

聖地巡礼に訪れたファンは、実際に現地  
でどのようなことを行ったのか。筆者の大  
学の演習クラスが実施したアンケート調査  
の結果から、実態を明らかにしていこう。  
この調査は、TVアニメ『ゾンビランドサガ』  
の聖地巡礼の実態解明を目的に実施したも  
のである（注1）。この調査は回答対象者の  
偏りを調整していないので結果の解釈に注  
意は必要だが、状況把握のためには大いに  
参考になる。

図1はその結果である。写真撮影は聖地  
巡礼には必須だ。調査では訊ねることがで  
きなかったが、撮った写真は巡礼記として、  
ツイッターやブログで公開される傾向があ

る。結果全体を見ると、ほぼ全てのファン  
たちは観光、食事、お土産購入を行ってい  
るので、「観光客」であるのは間違いない。  
巡礼ノートも旅館などに置かれているし、  
いわゆる痛絵馬もみられる（注2）。

「ファンとの交流」また「地域住民との交  
流」も目を引く。これらは、食事やお土産  
購入に比べると数値は低い、単なる「消  
費者」に止まらないファンたちがかなり存  
在していることがわかる。コスプレするファ  
ンたちも一部いるようだ。ファン交流につ  
いては、オフ会が開かれている。ある旅館  
はファンの居場所となっていて、たくさん  
のグッズが寄贈されている（注3）。

さて、実は「その他」が大変に興味深い。「聖  
地清掃（草むしり）」の回答が二つあった

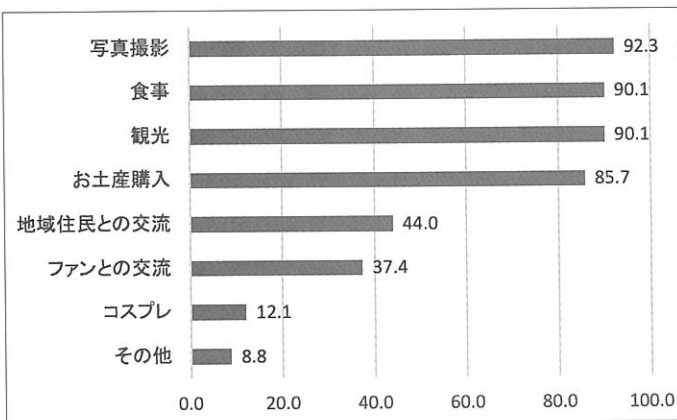


図1 ゾンビランドサガのファンが現地でやったこと（数値は%、筆者作成）

からだ。調査票の選択肢に清掃活動を取り上げていればもう少し回答者数が多くなったかもしれないが、選択肢になくてもあえて聖地清掃を取り上げたファンがいることが筆者にとっては驚きであった。なぜなら、それは自らの行動に明らかに意義を認めている証拠だからだ。実際ファン自ら、前号の写真で紹介した佐賀県唐津市の河川敷清掃ボランティアの参加者を募集していたようだ(注4)。ファン交流会を兼ねたものだった。奇しくもこの動きは、第1回で紹介した静岡県沼津市のボランティア募集とそっくりである。

### ■聖地清掃の伝統と参加動機

アニメ作品の聖地の美化清掃は一種伝統的な行動とも言える。アニメ聖地巡礼は古くは1990年代の初頭に遡るとされているが、オリジナルビデオアニメ『究極超人あゝる』(注5)のファンが始めた、舞台モデルとなったJR飯田線の田切駅(長野県飯島町)の清掃ボランティアが、探した限りでは最も古い記録だった。ファンたちは、当時から『田切ネットワーク』というボランティア団体を結成して、コロナ禍を乗り越え、現在でも取り組みを継続している(注



図2 らき☆すた神輿(2016年9月筆者撮影)

6)。それ以降も、例えば、長野県大町市の風景がモデルとなったTVアニメ『おねがい☆ティーチャー』(注7)のファンたちも、湖の環境保全活動を地元のNPOと連携して実施してきた(注8)。

このファンたちのボランティア精神はどこから発生するのか。動機については正直に言えばまだ研究界は決定的な結論を導いていない。しかし、一つのヒントがある。それは、あるアニメファンが吐露した「自分たちを快く受け入れてくれた町の人たち

への恩返し」という思いである(注9)。これは、TVアニメ『らき☆すた』(注10)の舞台モデルとされた埼玉県旧鷲宮町(現久喜市)の『らき☆すた神輿』(図2)の担ぎ手として参加したファンの声である。旧鷲宮町はアニメ作品の舞台モデルとなつてから、大勢のファンたちがそこへ訪問するようになった。そこで、地元としてファンにも伝統の地域の祭りである土師祭(はじさい)に参加してもらおうと、アニメのキャラを模したお神輿をファンと一緒に作ったのだ。これはまさにアニメファンが地元を受け入れられた画期的な出来事だったと山村教授は強調する(注11)。この土師祭の終了後に、ファンたちが自主的に清掃活動を行ったのだが、前出の声はその活動参加の動機を語ったものだ。

清掃作業はそもそも費用がかからず、かつ高い技術も要らない貢献活動だから、多くの人々が参加しやすい。しかし、なぜわざわざ旅先の掃除までしようとするのか。ファンたちは地域に並々ならぬアツい感情を抱いているからだろう。言い換えれば、アニメファンは旅先の土地のファンとなつたのかもしれない。その契機は、交流である。先のアンケート調査で聖地清掃を答えたファンは、ファン同士の交流だけでなく、

地域住民との交流を行っていた。ちなみに、両人ともに、凄まじいリピーターでもある。ゾンビランドサガに登場した様々な舞台モデルを訪れているが、累計で数十回の訪問を繰り返してきた。

■新しいコミュニティの発生

ファンは、全てではないものの、まるで地域の一員のように振る舞おうとしている。最近では、アニメ聖地巡礼をきっかけに移住者が増えている市町村もある。新聞報道によると、先にも登場した沼津市では、2019年に転入者数が転出者数を上回ったという。その原因の一つと考えられるのがアニメファンたちの転入である(注12)。移住まで至らなくとも、上記の通り舞台モデルとなった場所との何らかの関係を積極的に保とうとする動機を持つファンたちは確実に存在している。これは、新しい地域コミュニティの誕生とは言えないか。

大手前大学准教授・谷村要氏は、このアニメ聖地巡礼を媒介にしてファンたちと地元の人々とで作られる相互関係を「ジモト型コミュニティ」と名付けた(注13)。ここでいう「ジモト」とは、ここにしかない、かけがえがない「自分の帰属先」という意

味がある。舞台モデルとなった聖地は、ファンの「ジモト」になりえる。コミュニティとは、人々の様々な関係の蓄積のことだが、ここには、二つの人間関係がある。一つ目は、ファン同士の関係である。先にあげたファンのオフ会は典型例だろう。普段はネットコミュニティをファンたち同士で作っているが、実際「聖地」でお互いに出会い、親交を深める。もう一つは、ファンと地元との関係である。地元の人々は訪問するファンに対してイベント参加機会などの場の提供を行いつつ、ファンたちはお土産購入を含めた経済貢献のみならず、何らかの地元への交流や関与を試みようとする。交流と関与は一度きりのこともあるが、何十回、何百回という訪問を伴うことも決して少なくないのである。

ジモト型コミュニティは、まさに第1回で論じた「関係人口」を地域コミュニティとイかに結びつけるかという課題に、一つの道筋を示している。聖地に来訪するファンたちの多くは、その地域に居住潜在の経験がないが何らかのきっかけで往来する「風の人」であり、中には「関わりの階段」を上段まで昇る人々も生じている。地域外の人々と地元コミュニティとで「ジモト」をいかに生み出せるか。これがこれからの地

域コミュニティ論の重要なトピックの一つと考えるべきではないだろうか。

とはいえ、ここで注意すべきは、ジモト型コミュニティは自然に生まれて維持されるわけではないということだ。結論を言えば、地元の人々のファンに対する態度が大前提なのである(注15)。誰しも、旅先の旅館や土産屋で会話くらいはするだろう。しかしながら、リピーターとなつて何度も地元の人物に会いに行くというような交流を促そ

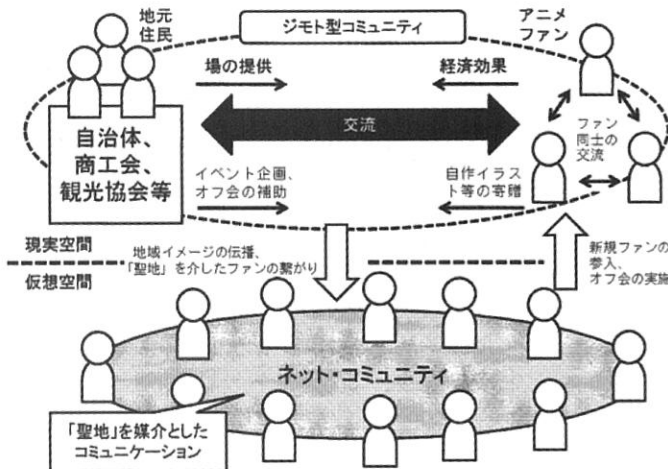


図3 ジモト型コミュニティ(注14)

うと思えば、地元側の訪問者への積極的な取り組み、理解と受容は欠かせない。ファンにとっての「行きつけの場所」を実現できるかは、地元側の動き方にかかっている。行きつけの店には、必ず自分を理解し受け入れてくれる「会いたい人」がいるのと同じである。したがって、舞台モデルとなった地元がファンを受け入れ、どのように関係を形成するかということが大きな課題となる。

## 補注

(注1) 2021年7月から10月にかけて、公開アカウントのTwitter (@naginendo) サガ聖地巡礼調査プロジェクト、[https://twitter.com/Zonsaga\\_Seichi](https://twitter.com/Zonsaga_Seichi) から、調査票をTwitter利用者に告知・公開した。調査票はGoogle Forms上に回答者が情報を入力し送信する方式である。最終的には113名から回答を得た。

(注2) 渚屋 Blog「ペンペランドサガ聖地巡礼【唐津編③】」<https://nagisaya.blog.jp/archives/53307782.html>  
2019年1月18日(2021年11月20日アクセス)。

(注3) 西日本新聞記事(2020年1月29日) <https://www.nishinippon.co.jp/>

[item/n/578753/](https://item/n/578753/) (2021年11月20日アクセス)。

(注4) @you\_ichi846「ペンペランドサガ」聖地でファン交流会&清掃活動」<https://twipla.jp/events/373831/>  
2019年(2021年11月20日アクセス)。

(注5) 週刊少年サンデーで連載された漫画が1991年にビデオアニメ化された作品。「光画部」(写真部)が撮影旅行を行うというストーリーが描かれた。バンダイビジュアル・ウェブサイト、<https://www.b-ch.com/titles/2847/> (2021年11月20日アクセス)。

(注6) 田切ネットワークウェブサイト、<https://taginet.work> (2021年11月20日アクセス)。

(注7) 2002年に放映された。長野県の高校に赴任した、地球を監視する宇宙人の風見みずほとその正体を知った高校生との禁断の愛を描いたラブコメ作品。アニメーションズ協会ウェブサイト、<https://animetourism88.com/ja/88Animespot>Please> (2021年11月20日アクセス)。  
続編も制作された。

(注8) 山村高淑「観光情報革命と文化創出型観光の可能性:アニメ聖地巡礼に見

る次世代ツーリズムの萌芽」『地域開発』第533巻、2009年。

(注9) 山村高淑「アニメ・マンガで地域振興:まちのファンを生むコンテンツツーリズム開発法」東京法令出版、2011年。

(注10) 2007年に放映。陵桜学園高校に通うオタク女子高生である泉こなたたち4人の学生生活を描いた作品。アニメーションズ協会ウェブサイト、<https://animetourism88.com/ja/88Animespot/luckystar> (2021年11月20日アクセス)。

(注11) 山村高淑「観光革命と21世紀:アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代的意義と可能性」『CATS叢書 メディアコンテンツとツーリズム:鷲宮町の経験から考える文化創造型交流の可能性』第1巻、2009年。

(注12) 中日新聞記事(2020年6月22日) <https://www.chunichi.co.jp/article/76600> (2021年11月20日アクセス)。

(注13) 谷村要「シモト型コミュニティ」の浮上」『日本情報経営学会誌』第32巻第3号、2012年。

(注14) 同上81ページ。

(注15) 同上。